

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、7月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（7月）

令和 3 年 6 月 30 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 6 月 24 日発表（6 月 26 日～7 月 25 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温	降水量	日照時間
四国地方	低 30 並 40 高 30% ほぼ平年並の見込み	少 20 並 40 多 40% ほぼ平年並か多い見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう 1 か月の降水量は平年並か多いでしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稻

(1) いもち病（普通期栽培：葉いもち、早期栽培：葉いもち・穂いもち）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

- (ア) 育苗期において苗いもちの発生を一部で確認している。
- (イ) 6 月中旬の調査では、早期栽培において葉いもちの発生を確認している。
- (ウ) 6 月 1 日～6 月 23 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適条件は県内（14 地点）の複数地点で認められ、特に 6 月 3～4 日、6 月 13～16 日にかけて感染好適条件が多く認められている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (エ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多い、日照時間はほぼ平年並とされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉いもちの発生は、梅雨期の降雨状況により増加するので常発地では特に注意する。
- (イ) 窒素質肥料の過用は避ける。
- (ウ) 置き苗は葉いもちの発生源になるので、補植後は速やかに除去する。
- (エ) 常発地では葉いもち確認後、治療効果のある薬剤で防除を行い蔓延防止に努める。
- (オ) 早期栽培では、穂いもちの発生を防ぐため出穂期の基幹防除を必ず行う。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 6 月中旬の早期水稻の調査では、発生を確認していない。
- (イ) 昨年、早期及び普通期栽培ともに並発生であったことから、圃場の菌密度は平年並とみられる。
- (ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 昨年発生が多かった圃場では特に注意する。
- (イ) 早期栽培では出穂期の基幹防除を必ず行う。
- (ウ) 薬剤が株元にかかるように散布する。

(3) セジロウンカ・トビイロウンカ

ア 予報の内容 飛来時期：（セジロウンカ、早）、（トビイロウンカ、今後の飛来に注意）
発生量：－（今後の飛来量に注意）

イ 予報の根拠

- (ア) 県内の予察灯（6 地点）の誘殺状況は、西条市 1 地点で 6 月 8 日（昨年 6 月 13 日）にセジロウ

ンカの飛来を確認している。西条市での初飛来は平年に比べ27日早い。なお、その後の飛来は未確認である。

(イ) 6月中旬の早期水稻(本田及び畦畔雑草対象)の掬取り調査では、セジロウンカを今治市と松前町の地点で発生を確認している。確認地点率は4.3%と昨年(41.7%)と比較すると低いが、県下全域に飛来しているとみられる。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされている。

ウ 防除上の注意

(ア) 長期残効性のある育苗箱施用剤を処理していない早期水稻では、今後の飛来状況に注意するとともに出穂期防除は必ず実施する。

(イ) 長期残効性のある育苗箱施用剤を処理している普通期水稻では、応急防除の必要はない。

(ウ) イミダクロプリド等トビイロウンカに対し効果が低下している育苗箱施用剤を処理、または育苗箱施用剤を処理していない普通期水稻では、今後の飛来状況に注意し応急防除を実施する。

(4) コブノメイガ

ア 予報の内容 飛来時期：早 発生量：－(今後の飛来に注意)

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の早期水稻の調査では、発生(被害葉)は確認していない。

(イ) 県内の予察灯(6地点)の誘殺は、久万高原町の1地点で6月15日に確認しており、平年に比べ2か月程度早い。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされている。

ウ 防除上の注意

(ア) 本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理していない圃場では、幼虫(被害葉)が多発した場合には応急防除を実施する。

(イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるため、肥培管理に注意する。

(ウ) 防除適期は成虫発生最盛期の7～10日後の若齢幼虫期である。

(5) イチモンジセセリ(イネツトムシ：第2世代)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並 発生時期：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の早期水稻の調査では、第1世代幼虫の発生は並である。

(イ) 6月中旬の第1世代幼虫は中～老齢であり発育は並であることから、第2世代幼虫は7月下旬頃からの発生が予想される。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 普通期水稻では本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理している場合は、応急防除の必要はない。

(イ) 上記の育苗箱施用剤を処理していない圃場では、7月下旬頃から被害が多くなると予想されるので若齢幼虫期(ツトの発生初期)に防除する。

(6) 斑点米カメムシ類(早期・早植栽培)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の掬取り調査では、本田での発生圃場率はやや少、畦畔の発生地点率は並である。また、捕獲虫数は本田及び畦畔ともやや少である。主な捕獲種はアカスジカスミカメであった。

(イ) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘殺数は、並～やや少である(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場周辺の除草を徹底する。出穂直前の除草はカメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的である。

(イ) 出穂時の定期防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期(出穂後10～15日頃)を目安に地域の防除指針に従い防除する。また、多発時には、さらに7～10日後に追加防除を行う。

(ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬取り調査による個体数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、新葉及び果実での発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 発病が認められる園地では、銅水和剤（炭酸カルシウム剤加用）等を散布する。なお、銅水和剤散布は葉害（スターメラノーズ）の発生する恐れがあるので注意する。

(エ) 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕は病原細菌の侵入箇所となるので防除を徹底する。

(オ) ‘甘平’、‘はれひめ’等の罹病性品種は注意する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、発病果率は多、発病度はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量約180mm（または散布後25日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、発生は少である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 薬剤はかけむらのないように丁寧に散布する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、新梢での発生が確認されており、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内をこまめに観察し、発病枝・発病果は早期に除去し園外に持ち出す。

(イ) 梅雨期は発病に好適な時期であるため幼果への病原菌の感染防止のために薬剤防除を徹底する。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図るとともに、園内の排水を良くする。

(イ) 梅雨期の薬剤防除を徹底する。防除では薬剤が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

(3) フジコナカイガラムシ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発園や多発園では第1回目の防除3週間後に2回目を行う。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生拡大注意

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、先月より発病度、発生葉率ともに増加したが、昨年の同時期と比較すると同程度の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 夏季における発病は、春先と比較して感染・発病は抑制されるものの、新たに病徴が認められたら、発病部位の切除など適切な対処が必要となる。

(イ) 周辺への拡散防止のため、園地見回りによる早期発見と発病部の早期除去を引き続き徹底する。伐採は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の当面の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(ウ) 7月以降の高温条件下では、果実のしぼみや枝枯症状が認められる。

(エ) 薬剤防除は、コサイド3000等の銅水和剤（葉害軽減のため、炭酸カルシウム剤200倍を加用）を梅雨明けまでに散布する。なお、銅水和剤は葉害を生じやすいので、高温時の日中は散布を控え、雫が落ちないように霧状に散布する。特に黄色系、赤色系では葉害を生じやすいので、散布に十分注意する。

(オ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤のアグレプト水和剤1,000倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）、マイシン20水和剤1,000倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）またはカスミン液剤400倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）のいずれかを使用する。なお、収穫前日数の関係から収穫の早い赤色系品種では使用しない。

果樹共通（もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かんきつ、かき等）

(1) カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップ・予察灯における誘殺数はやや少～少である（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) この時期は、曇天で夜温の高い日や山林に近い園地に集団飛来する傾向があるため、常に園内への飛来に注意し飛来確認後は早急に防除する。

野菜

(1) 黄化えそ病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、発生は確認していない。

(イ) 6月中旬の調査では、媒介虫のミナミキイロアザミウマの寄生虫数は並である。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生にはやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は、直ちに抜き取り適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) 今後、栽培を終了するハウスでは、きゅうりの株元を切断した上でハウスの密閉による蒸し込み処理を行い、媒介虫の夏秋きゅうり（露地栽培）への分散を防止する。

(2) 灰色かび病（夏秋野菜）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の調査では、夏秋トマトにおいて発生を確認しているが、やや少～並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的であ

- る。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 過繁茂や軟弱な成育、生理的な葉枯は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病果や枯死茎葉は早めに除去する。なお、葉枯れ箇所には本病原菌の菌叢を生じている場合には、圃場内での病勢が進展しているものと判断される。
- (ウ) 耐性菌の発生を防ぐため同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (3) うどんこ病 (いちご育苗床)
- ア 予報の内容 発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月の広域調査における育苗床での発生はやや少である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 発病は葉裏から始まるため十分に観察し、初期防除に努める。発病によって葉が巻き上がるまで放置しないようにする。
- (イ) 発病葉は出来るだけ取り除く。また、薬剤の付着性と通風を良くするため、老化葉を除去する。
- (ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を必ず加用する。ただし、ストロビーフロアブルには、浸達性展着剤(ニーズ、アプローチB I等)を加用しない。
- (エ) 薬剤散布では、薬液が葉裏や芽の間隙部までかかるよう丁寧に行う。
- (4) 炭疽病 (いちご育苗床)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 県内では罹病性品種が多く栽培されている。
- (イ) 6月の広域調査では、発生は並である。
- (ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑がみられる株は、直ちに除去して伝染源を減らす。
- (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後の防除を徹底する。
- (ウ) 発病前の防除に重点を置く。
- (5) アブラムシ類 (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月以降の黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は並で推移している(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 6月中旬の調査では、サトイモがやや少、夏秋ナスで並、夏秋きゅうりでやや多、夏秋トマトで多である。
- (ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察して早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。
- (ウ) ワタアブラムシは、一部のネオニコチノイド系薬剤の感受性の低下が認められる場合がある。
- (6) ミナミキイロアザミウマ (夏秋なす、夏秋きゅうり)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月中旬の調査では、夏秋きゅうりで並、夏秋なすでやや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (イ) 植物組織内部に産卵し、土中で蛹化するため薬剤が直接かからない生育ステージがあり、発生を見たら3～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を必ず実施する。
- (ウ) 系統の異なる剤の中から薬剤を選出し、ローテーション散布を心掛ける。

- (7) ハダニ類 (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月中旬の調査では、夏秋なす・さといもが並、いちご育苗床では多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら低密度時に防除をする。
- (イ) 同一薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- (ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。
- (8) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月以降のフェロモントラップによる誘殺数は、各地点とも少～やや少で推移をしている (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) さといもでは、食害面積率がやや多、20葉当たり寄生虫数は多である。
- (ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い被害葉の発生に注意し、若齢幼虫期に防除する。
- (9) コナジラミ類 (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月中旬の調査では、夏秋トマト・夏秋キュウリでやや少～並、夏秋なす・イチゴ育苗床でやや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
- (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用とする。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) コナジラミ類には、ウイルスを媒介するものがあるので発生に注意する。
- (10) オオタバコガ (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 6月以降のフェロモントラップ (5地点) による誘殺数は、並～やや多である (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並か多いとされ、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い、幼虫や被害果の早期発見に努め若齢期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所
ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫が出現しやすくなるので農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定し、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容を遵守し、農薬の種類に応じた保護具（防護服、マスク等）を必ず装着しましょう。